

中央大学の元理工学部長であった故吉田正昭先生の奥様と教え子たちの同窓会「中吉会」の皆さんが11月2日、韓国の大田（デジユン）市にある国立ハンバット大学を訪れ、蔵書6千冊を寄贈した。その訪韓の様を取りため私たちも「中吉会」に招かれ、図書寄贈の調印式のほか、大学総長へのインタビュ、学生との座談会、2日間のホームステイ、そして北朝鮮との国境にある板門店の見学など、充実した5日間を過ごさせていただいた。

韓国語の勉強をしたことのない私たちは「まず、韓国学生とのコミュニケーションがうまくとれるだろうか」ということが一番心配だった。不安な気持ちで成田を出発したが、ことし開港した仁川空港に着いてみ

ると、「初めまして。ようこそいらっしやいました」と流暢な日本語で学生たちが歓迎してくれたので、一同ホッとした。

大田市はソウルから高速道を南へ2時間のところにある人口120万人の中規模都市。車中で学生たちと会話を重ねているうちに「親子水入らずで暮らしています」といって、私たちがビックリさせたり、夕焼けを見て「この場合『美しい』と『きれい』と、どちらが正しい使い方がいいでしょうか」といった、こちらが返答に窮するような質問をされた。考えてみれば私たちがさえ夕焼けを見て『美しい』というのか『きれい』というのか、言葉の使い分けなんかを考えずに不用意に使っているんだ」ということも知らされた。

ハンバット大に蔵書6千冊

故吉田教授の奥様が寄贈

蔵書の贈呈式の調印式は3日、ハンバット大学図書館の2階セミナー室で行われた。日本側からは故吉田

教授の生前の功績 図書寄贈に至る説明などがあった。

人間の感覚器官 使って行う評価

教授の榮子夫人をはじめ、「中吉会」代表、在韓日本大使館員、大学側から廉弘詰（ヨム・ホンチョル）総長、金必圭図書館長らが同席した。吉田夫人と廉総長の調印のほか、吉田教

吉田教授は昭和3年ソウル生まれ。東京大学文学部心理学科を卒業。同学部助手、日本女子大文学部助教

韓国学生と 交流深める

之子榮
秀安理
谷井元
大玉柿
学生記者

を経て、昭和45年に中央大学理工学部管理工学科(現経営システム工学科)の教授に就任、学習、官能検査を中心とする人間工学や心理学の講義と実験を担当された。

人間工学とは、人間に適するように、どんな点に注意して道具・機械器具・環境などを設計すればよいかを研究する学問である。そして官能評価とは食品の味(味覚)、CDプレーヤーの音質、化粧品香り(嗅覚)、自動車の乗り心地(総合的な感触)など、人間の感覚器官を使って行う評価をいう。

平成6年、吉田先生の死去に際し中央大学から名誉教授の称号、同時に従五位勲三等瑞宝章が政府から授与された。

現地紙も顔写真を を入れて報ずる

蔵書の寄贈に当たり「中吉会」からは、蔵書目録に記載された全書籍を一括して受け入れが可能で、1カ所にまとめて蔵書することが、その条件とされた。複数の候補校の中から選考の結果、国立ハンバット大学へ寄贈されることになった。



榮子夫人から記念プレートを受ける廉総長

日교수 장서 6천권 한말대에

일본인 교수의 유족과 제자들이 고인이 소장하고 있던 희귀 도서를 3일 한말대에 기증한다.

고(故) 요시다 마사아키(吉田正昭·사진)전 일본 주요(中央)대 교수의 부인 요시다 에이코(吉田榮子·74·의사)여사는 이날 대전 한말대를 찾아 영흥철(廉弘喆)총장에게 남편의 유품인 인간공학 및 심리학 관련 도서 6천여권을 기증한다.



18세기에 출간된 세계적 희귀본 30권 등 10억 상당 시가 10억원 상당이다. 이번 기증은 고인의 대학원 제자인 민병진(閔秉眞·40·표준과학연구원 선임연구원)박사와 廉총장의 끈질긴 설득으로 성사됐다.

인간공학 분야의 권위자였던 요시다 교수는 서울에서 태어나 경성중(현 경기고)을 거쳐 경성제대(현 서울대) 재학 중 일본으로 건너가 도쿄(東京)대 심리학과를 수석 졸업한 뒤 25년간 주오대 교수로 재직했다.

대전=최준호 기자
<chojih@joongang.co.kr>

吉田先生の顔写真入りで報じた「中央日報」

調印式の最後に、吉田榮子さんは「教授の『魂』である蔵書が分散されることなく、1つの場所に収められたことを幸せに思う」と涙ながらに述べられた。この式典は韓国メディアにも多く取り上げられ、中央日報には「故吉田正昭・中央大学教授の夫人である吉田榮子氏はハンバット大学の廉総長を訪ね、夫の遺品である人間工学および実験心理学に関連する図書約6千冊を寄贈した」と吉田教授の顔写真入りで報じられている。

吉田文庫は図書館2階の一室にあ



書架に収まった蔵書

り、図書館の方に案内していただいた。

ここに収められた蔵書は日本語より英語のものが多く、ハンバット大には経営工学科はないが、産業工学科でこれらの分野について学ぶことが可能になる。学生が自由に借りることができ、今後はインターネットですぐに検索できるシステムをさらに整えていく予定だという。ただし、貴重な本のため1830年から1910年の時期の蔵書30冊は、別の書棚に収められており、閲覧のみの利用になっている。

今の学生は感情表現が率直

◆廉総長インタビュー

廉総長にインタビューすることができた。総長からご覧になった学生像、今後の大学の展望、学生に望むことなどをお聞きした。

いまの学生たちは40〜50代の人たちと比べて、勉強しているのではないかと、と総長はいわれた。昔は建前

主義的などころがあったが、いまの学生は実質的で感情表現が率直であるという。かつては大学の専攻を決める際、親にいわれるまま、建前のある職業に関わるもの、例えば文系なら法学、理系なら医学といったものであったが、いまではコンピュータやデザイン、マスコミ関係、映画・演劇など、自分が本当にやりたい



(左上)インタビューに答える
廉総長
(右)大学のシンボルとなっている図書館
(下)記念式典に勢ぞろいした
日韓関係者



いことをやる。

日本で大学生、特に理系学生の理数系科目の実力が低下していることが話題になったことについて、「ご意見をうかがってみた。韓国では中学校からレベルの高い教科書で勉強しており、理科系の世界大会などでも優秀な成績をあげている。

だが、大学に進学してアメリカなどの先進国に比べると、創意力、自ら考えつくり上げていく能力に関しては韓国の学生はまだ劣っている面があるという。しかし、基本的なレベル、能力については相対的に見ても、韓国の学生はそれほど問題はないうことだった。ということ、やはり韓国は受験中心の社会で大学受験がとても難しいので、基礎学力については良く勉強しているからである。

総長は学生に望むこととして、①合理的で礼節な批判精神を持つ。②危機を乗り越える判断力を持つ。③厳しい状況下にあっても、それを乗り越える強靱な力を持つ。④時代、社会の変化にスピーディーに対応できる適応力を身につけよう、の4点を力説された。

※

私たちは別の機会に行われた学生との懇談会で感じたのは、彼らは日本語や英語をよく勉強しているということだった。その点を聞いたら、彼らにとって外国語は社会での生活手段である。海外のネットを見るときも英語は必須である。

また、日中韓は歴史で密接に関わっている。政治はもちろん、経済、



公園から見下ろす大田市街地

文化面で、協力し合う必要があるし、理解を深めるためにも語学は必要である。ハンバット大学では「外国語卒業認証制度」というものを設ける予定があるようだ。卒業するときに

すべての授業で出欠をとる

◆学生8人と対談

座談会は日本語学部の金徳煥さん

学生の外国語のレベルを一定のところまで達するように支援していく制度である。そのために二ーズに合わせ外国語の教科を導入していく方向だという。

ら8人の学生と対談した。まず、どのような学校生活を送っているかということだった。私たち日本の学生では、なんの違和感もなく出てくる質問だが、それは「授業にはちゃんと出ていますか」というものである。案の定、彼らは戸惑いの表情を浮かべながら、「もちろんです」。逆に「日本は授業にでないのですか」と聞かれてしまった。

彼らの説明だと「韓国ではすべての授業で出欠を取るため授業をさぼることは考えられない。そして3回遅刻で1回の欠席扱いになり、4回休むと単位が与えられない。また、どの授業にもレポートが課され、出欠と中間・期末試験にレポートの結果が加味されて成績が決まる」。日本なら、かなり厳しいが、韓国ではこれが当たり前なのである。そもそも、この質問をしたこちらが「なん



韓国学生の案内で宝文山公園を散歩

て、ナンセンスな質問をしたのだらう」と反省した。さすがに「日本では授業にあまり出なくても、単位が取れる授業がありますよ」とはいえなかった。

アルバイトをする学生は全体の4割ぐらい。授業の模様を聞いたあとだけに、それは納得できた。バイト先はマクドナルド、ロツテリア、ケントッキーフライドチキンなどで、こちらは日本と変わらなかった。

企業によって大きな初任給格差

韓国の大学受験の話聞いて驚いた。韓国では大卒の初任給が10万円ぐらいたそうだが、ソウルなど有名大学を出て大手企業に入ると、20万円ほどになる。こういうわけだから、受験競争が激化するの当然なのだろう。また、大学に進学できるかどうかは中学の段階で決まってしまう。つまり、高校選びの際に大学進学組の高校と就職組の高校が、日本以上に明確に分かれているかららしい。

就職については韓国も不況下にある。男子学生の人気はIT関連のベンチャー企業を興すこと、女子学生



韓国学生と仲良くテーブルを囲む
学生記者

は公務員や教師に人気が集まっている。そして一般的に男女間の賃金格差というものもあり、男女の昇進格差も残っている。

最後は日本の学生には体験がない「徴兵制」について聞いてみた。韓国は国民の義務として軍隊に入らなければならぬ。その期間は2年2カ月に及ぶ。大学生の間は兵役を免除されるが、座談会に出てくれた学生は、いったん大学に入り、休学して軍隊に入っている。入隊後は異なった体験をしており、なかには射撃訓練や戦車に乗って30^キ以上ある砲弾を装填することもやっている。

心に残った「私たちの夢は統一」

◆板門店見学

訪韓4日目。私たちはデジユンの学生たちに別れを告げ、ソウルへ向かった。彼らと一緒に過ごした時間は短かったものの、お互いにすっかり打ち解けたので、とても悲しい別れとなった。

翌日、目指したのは板門店である。つい数日前までは、例のアメリカの同時テロの影響でツアーは中止され

兵役に就く前と後では、どのような気持ちの変化があったかについては、ほとんどの学生が「これからは自分一人で生きていかなければならない」と、ものの考え方がガラリと変わったと話してくれた。確かに、学生のそれぞれが日本の学生より逞しいと感じたことである。

ある学生は現在、英語を必死になって勉強しているといっていた。それは英語の出来、不出来が将来の出世に影響するためらしい。「自分と自分の将来の家族のために英語を勉強しています」ときっぱり話す姿が印象的だった。

ていたらしいが、再開されていた。ソウルから出るバスは午前9時に出発した。平日にもかかわらず2台の大型バスが満員になるほどのツアー客だ。しかも、英語圏の2人を除けば、みんな日本人だった。

1時間半ほど乗ったところで緊張場面が始まった。まず、その一つが一見、何でもない青い広告の看板だった。看板の下をくぐる時、ガイドさんから、看板の中側には爆弾が

びつしり詰まっていると聞き、バスがそろそろ通る時は少し背筋が寒くなった。

少し行くと、キャンポブニバスの手前から、バスが突然S字走行を始めた。何事かと思つて窓の外を見ると、10メートルほどの間隔を置いて腰の高さほどの大きなコンクリート塊が左右交互に置かれている。バスはそれを縫うように走っていたのだ。これも軍事目的で、乗物がその区間を早く走れないようにするためらしい。

バスから見えなかったが、板門店の近くに一つの村がボツンとあるそうだ。この村に住むと生活するのにリスクを伴つたため、全面的に税金が免除されるから、みんなお金持ちらしい。「優雅な暮らしをしたい日本の皆さま。ぜひこの村に嫁いでください」とガイドされたが、誰からも笑いは出なかった。

いよいよ板門店だ。国連軍の防弾ガラスのバスに乗り換えた。バスの中には兵士の姿。お客さんはみんな緊張している。バスから降ろされた私たちは小さなシアターのある部屋に案内され、プリントを配られた。プリントは同意書で、「板門店で万一、



南北休戦の会談場。テーブルの真ん中を走るマイクのコード

何かが起きて被害に遭つても、責任は自分にあります」というものだった。「何が起きたら嫌だなあ」と思いつながら、しぶしぶサインした。

平和の家の前を通りすぎたところでバスを降り、南北の休戦会談に使う自由の家に入った。雑談は許されない。韓国側では、目の動きを他人に悟られないようにサングラスをした韓国兵士が体半分を壁に隠し、北の方面をじつとにらんでいた。

中に入ると、部屋の真ん中に長い机とその上にマイクがあり、横には兵士がマネキンのように身構えている。緊迫感はいよいよ募ってきた。

しかし、その緊迫感より、日本人観光客が写真を撮るパシャパシャ撮つてい

◆力みなぎる料理

「寒い」が韓国に来て一番最初に感じたことだったが、ホームステイでお邪魔した、金属工学科4年の盧英善さんのお宅に入った時は「暖かい」と感じた。なにしろ韓国の家には、オンドルという暖房設備が普及している。いわゆる床暖房だが、こ

るのが私には変に感じた。そういう私も今回の韓国訪問は取材という目的を持っていたので写真を撮らざるをえなかったが、できることなら撮りたくなかった。

「帰らざる橋」「世界一高い北朝鮮の国旗掲揚棒」「南北の衝突が起きた場所にあるポプラの切り株」などをひと通り見たが、いまの板門店は私が考えていたものより観光地化し、やや興ざめした感じだった。

しかし、その舞台は重苦しいものを背負っている。いつかは統一されて平和な場所になるのだろう。みやげ物店のテレビで流れていた「私たちの夢は統一」という文字が、すこく心に残った。

話は尽きぬ

ホームステイ

れがどの部屋にも入っている。盧さんは両親と二人の妹さんと住んでいます。私に「親子水入らずで暮らしています」と説明してくれた学生である。

私は朝食のため、盧さん親子と一緒にテーブルについた。お母さんが手作り料理を出す。自家製のキムチに韓国海苔に肉と野菜の炒め物にこ

飯とスープ。それに特製朝鮮ニンジン入り蜂蜜ジュースである。

まず真っ赤なキムチを食べる。辛くない。思わず特製ジュースを飲む。こちらは甘すぎたので、半分ぐらい残してしまった。前の2人は平気な顔

をして飲んでいる。あとで、お母さんが私のジュースだけ、蜂蜜を入れすぎたことが分かった。でも、「キムチ」「蜂蜜」「朝鮮人参」と力が必要な料理のかずかず。いずれも私の口に合いました。(大谷)



盧英善さん(右)と

「両親の記念スナップ



大田の商店街。ハングル文字の看板に目がくらむ

◆「両親の笑顔が

私は日本語科4年の高雲さんの自宅にホームステイさせていただきました。彼女の家は大学の近くにあるマンション群の一角にあります。宝山山という近くの山に登り、展望台から市街地を眺めたら、高層マンションが林立していました。建物の側壁には日本よりカラフルな色彩の模様を描かれています。

彼女の部屋と一緒に寝かせてもらいましたが、アルバムを見せてくれたりして、すっかり夜更かししてし

◆弟さんは徴兵され

日本語学科4年生の金恩眞さんのお宅にホームステイ。といっても、お宅はキリスト教の教会だった。韓国のキリスト教徒は20%とか。残念ながら、彼女の両親は夜遅くまで教会でお祈りをあげていて、ゆっくりお話を聞く時間がなかったものだから、いまいち、韓国のキリスト教を感じる事ができなかった。

家はもちろん、オンドル暖房でした。金さんと二人で床にベッタリと

まいりました。また、彼女は昨年冬の日本を訪れ、大雪にびっくりしたらしいのです。大田市は気温は低くても雪が降ることはあまりないらしいとのことでした。

日本語が達者な高さんでしたが、さすがに外国語を話すことはエネルギーが要ることだと思いました。時々、辞書を引きながら、いろいろな話をしてくれ、その心遣いがとても嬉しかったです。お父さんやお母さんも言葉は通じなくても、優しく迎えてくださった笑顔がありがたく感じました。(玉井)

座って、彼女のアルバムを見たり、テレビを見たりした。彼女には21歳の弟さんがいるが、ちょうど徴兵されていて会えなかった。私は彼の部屋に泊したが、部屋のカレンダーは3月からめくられてなく、時計も止まっていた。彼が家を出るときに止めてしまったようだ。

大田を離れる日も日曜だったために礼拝があり、「両親にろくな挨拶もできず、お父さんとも握手をしただけで別れてしまった。とても心残りだった。(柿元)